

# 「五足の靴」をたどってみよう！ in あまくさ

## ○「五足の靴」って？

明治40年(1907)8月、東京新詩社の与謝野寛・北原白秋・太田正雄(木下杢太郎)・吉井勇・平野万里という五人が、天草を訪れました。この時、彼らは旅先での体験を紀行文として書き、東京二六新聞に発表。この紀行文のタイトルが「五足の靴」です。

与謝野寛(よさのかん)



“鉄幹”の名前で知っている人も多くは、東京新詩社主宰、35歳。この旅行のリーダーです。与謝野晶子の夫であり、衆議院議員与謝野馨氏のお祖父さんです。歌人としても素晴らしい作品を数多く残していますが、白秋や勇、杢太郎、高村光太郎、茅野蕭々など若手の才能を見抜き世に送り出す手腕に長けていました。原文では「K生」で登場。ちなみに、“鉄幹”の名は明治38年に捨てており、以後は使用していません。

北原白秋(きたはらはくしゅう)



福岡県柳川出身の詩人。近代詩歌・童謡などで最も有名。早稲田大学高等予科、23歳。明治39年から新詩社に加わり、将来を嘱望されていた存在。九州出身のため、この旅行の旅程を作る役割を担当しています。異国趣味に最も関心を持ち、旅行を通じて作った作品は『明星』『スバル』で発表し、明治42年処女詩集『邪宗門』に結実。原文では「H生」で登場。

太田正雄(おおたまさお)



静岡県伊東市出身。東京帝国大学医科大学、23歳。明治40年になって新詩社に参加したばかりの新人でしたが、「五足の靴」旅行で長崎・島原・天草を訪れるように決めさせた人物。この旅行のキーマンです。この旅行で周囲に触発され初めて詩を作ることを覚えますが、白秋と並び称されるほどの天才ぶりを発揮。文学活動では、後に「木下杢太郎」と名乗ります。原文「M生」。

吉井勇(よししいさむ)



東京都出身。早稲田大学高等予科、22歳。祖父は鹿児島県出身で、九州とは縁をもつ。明治38年から新詩社に参加。短歌を主として活躍し、後に与謝野晶子から「人麻呂一和泉式部一西行一勇」という順序をもって短歌は大きな飛躍をしてきたと信じています」と称賛されました。白秋・正雄に次いで異国趣味的影響を受け、短歌作品を残しています。原文では「I生」として登場。

平野万里(ひらのばんり)



本名平野久保(ひさやす)。埼玉県出身。東京帝国大学工学科、23歳。高校生の時に森鷗外を通じて与謝野と出会い、新詩社に参加。与謝野が特に才能を評価し、既に歌集を刊行し文壇にデビューしている新進歌人です。この後、国家公務員として日本の化学工業発展に尽くしたため作歌活動は少なかったが、与謝野を生業師と仰ぎ、師のため雑誌編集作業などの裏方に徹し与謝野を支え続けました。原文では「B生」として登場。

## ○「五足の靴」の旅程は？

一行は、天草を含め西北九州を旅しています。7月28日東京駅を出発した一行は、7月31日に福岡、その後柳川・佐賀・唐津・佐世保・平戸・長崎を経て、天草に来たのが8月8日。天草には8月10日まで滞在し、三角・島原・長洲・熊本・阿蘇・熊本・柳川と旅します。柳川を後にしたのは8月17日。その後旅は徳山・京都と東京への帰路が描かれています。

| 東京二六新聞 | 小題目  | 掲載日    | 推定行程日・宿泊地 |
|--------|------|--------|-----------|
| 29回    | 彗星   | 10日 火  | 車中泊       |
| 28回    | 京の山  | 9日 月   | 京都        |
| 27回    | 京の朝  | 8日 日   | 京都        |
| 26回    | 西京   | 7日 土   | 重中泊       |
| 25回    | 月光   | 6日 金   | 徳山        |
| 24回    | 徳山   | 5日 木   | 柳川        |
| 23回    | 柳河   | 3日 火   | 柳川        |
| 22回    | みやびを | 9・2日 月 | 柳川        |
| 21回    | 三池炭坑 | 30日 金  | 熊本        |
| 20回    | 画津湖  | 29日 木  | 熊本        |
| 19回    | 噴火口  | 28日 水  | 阿蘇 栃木     |
| 18回    | 阿蘇登山 | 27日 火  | 阿蘇 垂玉     |
| 17回    | 熊本   | 26日 月  | 熊本        |
| 16回    | 長洲   | 25日 日  | 熊本        |
| 15回    | 有馬城址 | 24日 土  | 島原        |
| 14回    | 海の上  | 23日 金  | 島原        |
| 13回    | 大江村  | 22日 木  | 天草 牛深     |
| 12回    | 大失敗  | 21日 水  | 天草 大江     |
| 11回    | 蛇と轟  | 20日 火  | 天草 大江     |
| 10回    | 荒れの日 | 19日 月  | 天草 富岡     |
| 9回     | 平戸   | 16日 金  | 平戸 / 長崎   |
| 8回     | 佐世保  | 15日 木  | 佐世保       |
| 7回     | 領布振山 | 13日 火  | 唐津        |
| 6回     | 雨の日  | 12日 月  | 佐賀        |
| 5回     | 潮    | 11日 日  | 柳川        |
| 4回     | 砂丘   | 10日 土  | 柳川        |
| 3回     | 福岡   | 9日 金   | 福岡        |
| 2回     | 赤間が関 | 8日 木   | 下関        |
| 1回     | 厳島   | 8・7日 水 | 下関        |

【栗山智子「五足の靴の旅程」『五足の靴 九州旅行と南蛮文学』平成5年、野田宇太郎文学資料館）掲載表を参考に改変・作成】

## ○天草の詳しい道のりと日程は？

長崎の茂木港を出発し、富岡港に到着したのは8月8日。その日は富岡に一泊し、8月9日富岡を出発、昼過ぎに下津深江(下田温泉)につき、昼食と休憩。昼3時過ぎに下津深江を出発し、高浜村へ。高浜村で道を尋ね、旧庄屋上田家で古文書を読む。夕方高浜村を出発し、山中で道に迷いながら大江村についたのは夜10時頃。大江泊。8月10日午前中大江天主堂に行き、「パアテルさん」ガルニエ神父と会う。午後2時、大江港発の汽船にのり、牛深へ着いたのは夕方。牛深泊。8月11日、朝3時の汽船で出発し、天草の旅は終わりを告げます。

## ○天草で泊まった宿の名前は？今もありますか？

富岡 原文に記述がなく、わかっていません。  
 大江 原文に名前は出てきません。現在の「高砂屋」にあたりますが、当時は名前も違ったようです。  
 牛深 今津屋という宿屋。現在はありません。

## ○一行は下田温泉に入浴したの？

温泉に入ったという文章がないので、入浴したかどうかははっきりとわかりません。原文によると、「下津深江という湯の出る港」で、地元の“農事講習会”のために茶屋も宿屋も断られ、「物売る家」に頼み込んで休憩させてもらっています。

## ○「パアテルさん」はどんな人？

「パアテルさん」は、本名ルドヴィコ・フレデリック・ガルニエ、フランス人でキリスト教パリ外国宣教会(カトリック)の神父です。明治18年(1885)来日。京都・長崎を経て天草の大江・崎津教会主任司祭として来島したのは明治25年(1892)で、32歳の時でした。一行が訪れた時は天草での生活が15年を過ぎ、天草キリシタンの歴史と現状を語り、原文では「天草言葉がなかなか巧い」という印象が記されています。昭和17年(1942)、82歳で亡くなるまで50年間一度も帰国することなく、天草の人々のために尽くしました。



ガルニエ神父と大江教会(当時)

## ○当時の面影を残す場所を巡ろう！ →場所は、裏面の地図で紹介しています。

- ①富岡城址(天草郡葦北町富岡)  
江戸時代、唐津藩寺沢氏の築城で、天草島原の乱の舞台にもなりました。乱以後も富岡城と城下の富岡町は天草の行政の中心でした。一行が訪れた頃は石垣だけで建物はありませんでしたが、本丸建物を復元し平成15年に「富岡ビクターセンター」として開館しました。
- ②五足の靴文学遊歩道(天草市天草町下田)  
徒歩で大江天主堂を目指した天草西海岸の道。一行が歩いた旧道の一部をできるだけ当時の姿を留めるように整備されました。全長3.2kmある遊歩道を歩けば、8月の酷暑と戦いながら水をかぶ飲み、「パアテルさん」を求めた彼らの旅にシンクロできるかも!? 上り下りばかりの難道ですが、途中には展望所もあり、景色を楽しんだり休憩しながらでも2時間ほどで踏破できます。毎年11月3日には「五足の靴ウォークラリー大会」の会場となります。
- ③上田家住宅(天草市天草町高浜)  
江戸時代、高浜村庄屋を代々務めた旧家。この旧宅は文化12年(1814)の建築。国登録有形文化財です。また、敷地内にある「上田家資料館」には、白秋が読み漁り、「ここは面白い、泊まろう」と提案するも寛と正雄に「目的はパアテルさん」と諭され、後ろ髪を引かれつつ後にした上田家文書(県指定文化財)の一部も展示されています。
- ④高砂屋(天草市天草町大江)  
一行が宿泊した大江の宿。原文では木賃宿と紹介され名前は出てきません。当時は名前も違ったようですが、建物は名残を留めていると言われています。また、一行が宿泊した部屋も残されていますが、現在では旅館営業されていないので公開されていません。
- ⑤大江八幡宮の鳥居(天草市天草町大江)  
太田正雄(木下杢太郎)のスケッチ「天草下島の大江村」に、神社の鳥居が描かれています。大江の浜は当時砂浜でしたが、埋め立てて漁港となっています。現在鳥居の上部が取り払われていますが、名残をとどめています。

一行が歩いた天草西海岸の道は、「五足の靴文学遊歩道」以外は通れませんが、彼らが見た西海岸の絶景は、今も変わらず旅人を迎えてくれます。国道389号線でのシーサイドドライブは快適！西海岸の景勝と天草灘のマリンブルーの美しさは格別です。

○一行が天草の風物で感じた「異国情緒」のおはなし

- ①葡萄（ぶどう）  
 高浜村の印象を、「高浜の町は葡萄に覆われている。家ごとに棚（※葡萄棚のこと）があり、棚がない家は屋根に這わす」と書かれ、南国の趣を感じています。残念ながら、現在は1軒の民家にしか残っていません。
- ②無花果（イチジク）  
 昭和27年、吉井勇が「温泉の湧く村（※現在の下田温泉のこと）の無花果の下で弁当を食べたのを覚えている」と述懐。他にも、旅行後作った詩・短歌に数多く歌われ、異国のイメージを象徴するもののように見えています。李太郎詩「あまくさ」では「・・・無花果島の少女らに」、白秋の詩「鵲」「角を吹け」など、彼らの数多くの作品に歌われています。



高浜葡萄

○文学碑めぐりをしてみよう！

- 与謝野寛歌碑 天草市天草町高浜の十三仏公園に、晶子夫人の短歌とともにあります。昭和47年に建立。  
 寛 「天草の十三仏の山にみる海の入日とむらさきの波」  
 晶子 「天草の西高浜の白き磯江蘇省より秋風ぞ吹く」 ※共に昭和7年天草来島の詠草。『冬栞』に掲載。
- 北原白秋詩碑 天草キリシタン館敷地内に昭和42年建立されました。キリシタン館改築のため、現在収蔵されています。
- 吉井勇歌碑 天草市天草町大江の大江天主堂前にあります。2基あり、昭和27年と平成13年にそれぞれ建立されました。  
 「白秋とともに泊まりし天草の大江の宿は伴天連の宿（昭和27年・1号歌碑）  
 「ともにゆきし友みなあらず我一人老いてまた踏む天草の島（平成13年・100号歌碑）」
- 木下李太郎詩碑 天草ロザリオ館敷地内にあり。李太郎の詩「あまくさ」を平成16年に建立
- 平野万里歌碑 天草ロザリオ館敷地内にあり。李太郎詩碑の横。平成18年に建立。  
 「赤葡萄たわわにみのり風かをる南の島をけふもさまよふ」



李太郎詩碑と無花果

○「五足の靴」のことを知りたい！というあなたに。

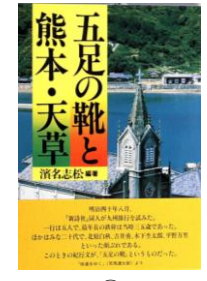
- ・濱名志松と五足の靴文学資料館 天草市天草町大江 721-1 0969-42-5040  
 天草出身の五足の靴研究者・歌人の故濱名志松氏の自宅を改装した資料館。  
 濱名氏と吉井勇の交流がわかる吉井勇の直筆手紙や短歌色紙、五足の靴関連資料を展示。
- ・天草市立天草ロザリオ館 天草市天草町大江 1749 0969-42-5259  
 五足の靴の解説・紹介、作品や関連資料展示。

○「五足の靴」を読みたい！知りたい！というあなたに。

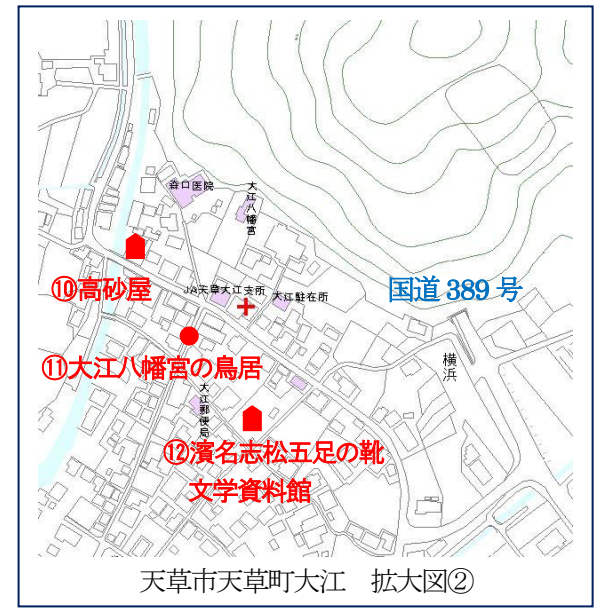
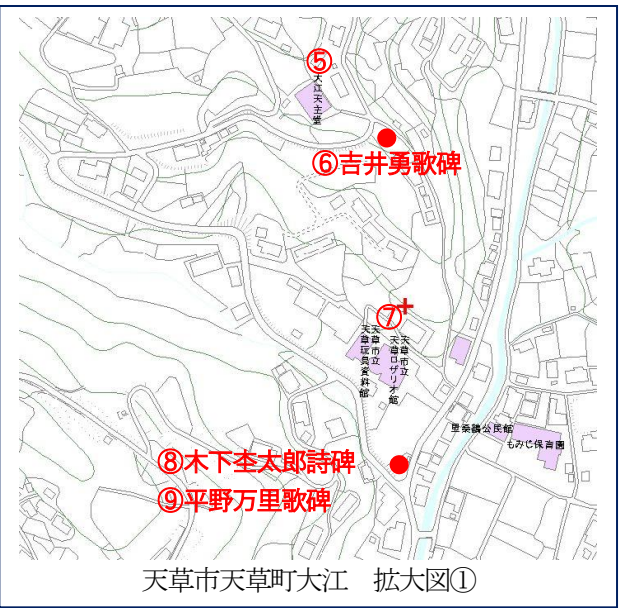
- ①岩波書店『五足の靴』2007年5月  
 お手軽な文庫本サイズ♪ 「五足の靴」原文のみです。
- ②濱名志松『五足の靴と熊本・天草』昭和58年6月 国書刊行会  
 天草出身の研究者、故濱名志松氏の著書。濱名氏と吉井勇の交流、五足の靴発見者である文学者野田宇太郎との交流、吉井勇歌碑や北原白秋詩碑建立の思い出、五足の靴研究などを書き上げた本。巻末には「五足の靴」原文も掲載されています。



①



②



⑤大江天主堂



⑥吉井勇歌碑(2基)



⑦天草ロザリオ館



⑨平野万里歌碑



⑩濱名志松・五足の靴文学資料館